

2021年は戦後76年目の年である。この数字は何の節目にもならないが、明治維新から太平洋戦争敗戦までが77年で、「戦後」という時代が、近代国家建設の名の下内戦と侵略戦争に明け暮れた期間とついに肩を並べるに至った。この間、日本は対外的には、自衛隊の海外派遣や安保法制なた後な歩みを進めつつも、それでも憲法9条のもとで「太平の世」を過ごしてきたと一応は言いうる。

そして、その光の反面に、同じ期間にわたる沖縄の米軍基地集中とその被害の継続があったことも事実である。そればかりか、沖縄は、太平洋戦争までの77年も、独立国を強制的に併合した琉球処分に始まり、最後には本土防衛の捨石作戦によって見捨てられてきたのである。

この歴史を知っていたからこそ米国は、沖縄を切り離して支配することについて日本側からの抵抗はないと読んでいたのだ。残念ながら、まさに日本における沖縄の位置を適確に把握していたというほかない。マッカーサーは、1947年6月の記者団との会見で、「沖縄諸島は、われ

沖縄の米軍基地撤去は 日本の歴史的責務

われの天然の国境である。米国 が沖縄を保有することにつき日 本人に反対があるとは思えない。 なぜなら沖縄人は日本人ではな く、また日本人は戦争を放棄し たからである。| と述べ、また、 翌年にも、「沖縄の人々は日本人 ではなく、日本本土へ渡っても 決して同化することはなかった。 日本人は彼らを見下した。…米 国が琉球に基地を開発すれば、 (沖縄の人々は)かなりのお金を 稼ぎ、まあまあ幸福な生活を送 ることであろう」とも述べた(中 野好夫・新崎盛暉「沖縄戦後史」〔岩 波新書]14頁)、(明田川融「沖縄基地 問題の歴史」[みすず書房] 110頁)。 米軍の沖縄支配が、このような 日本の沖縄に対する差別的な支 配関係をも利用してなされたこ とに照らすと、日本にとっての 1945年の歴史の転換も、沖縄に とっては琉球処分に始まる構造 的差別の継続でしかなかったの かもしれない。

2015年8月12日の辺野古問題 での集中協議にて、翁長雄志知 事が「戦後、普天間の住民がい ない間に強制収容されてつくら れた基地、これが原点だ」と述 べたのに対し、菅義偉官房長官 は「世界一危険な普天間基地の 危険性の除去のため日米で辺野 古移設を決めたことが原点だ」 述べた。菅官房長官は、この当 時繰り返された協議の中で、「戦 後生まれなので沖縄の歴史はな かなか分からない」と開き直っ てもいた。このような人物には およそ「沖縄の基地負担の軽 減」を期待することは能わない。

辺野古新基地建設は、普天間 基地返還合意から25年目の今も 進まない。なのにいまだに「辺 野古唯一 | を繰り返す政府。そ してその理由が「一刻も早い普 天間基地の危険性の除去 | であ る。あきれて物も言えないとは このことだ。市民の安全が目の 前で脅かされていて直ちにその 危険性の除去が必要だと言いな がら、25年も実現しない政策に 固執し、さらに、その新基地政 策が仮に最も早く実現するとし てもこれから14、5年以上かかる のである。しかも、沖縄県民が 辺野古新基地に反対している以 上、順調に建設がなされること はありえない。

辺野古新基地建設計画は、と うの昔に失敗した政策なのであ る。今風にいえば 「オワコン」(も うこの言葉も賞味期限切れらしい が)とでもいうのか。目まぐるし く世界情勢が変転する中で、辺 野古新基地に予定されている機 能が永遠に安全保障上のカギと でもなるかのような幻想も捨て 去られなければならない。加え て、沖縄に集中する固定された 米軍基地がミサイル技術の日進 月歩の高度化によって極めて高 いリスクにさらされてきている ことも、既に軍事的には常識で ある。そのことは、沖縄に住む 人々自身が万が一のときに最初 に被害を受けることを意味する のだ。

過ち、誤りを認めない政治がこの国を黒く覆っている。桜もモリカケも、そして辺野古の過ちも。これを変革する社会への取り組みがますます沖縄の生存にとって不可欠となってきているのだ。

(かとう ゆたか)